

令和5年度
東京都現代美術館美術資料収蔵委員会
コレクション部会

令和6年1月31日（水）

東京都現代美術館

午前 9 時59分開会

中村文化行政専門課長：本日は、お忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。

ただいまから令和 5 年度東京都現代美術館美術資料収蔵委員会コレクション部会を開催いたします。

私は、東京都生活文化スポーツ局文化振興部文化行政専門課長の中村と申します。議事に入るまで司会を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、東京都生活文化スポーツ局文化施設・連携推進担当部長の富岡から御挨拶を申し上げます。

富岡文化施設・連携推進担当部長：おはようございます。改めまして文化施設・連携推進担当部長の富岡と申します。

今日は、皆様大変お忙しい中、御出席いただきましてどうもありがとうございます。

東京都現代美術館でございますが、我々、日本を代表する現代アートの美術館というふうに勝手ながら標榜させていただいておりまして、国内外の美術作品の収集・保管を積極的にしながら、多彩な分野の現代アートを都民の皆様に展示を通して紹介をするということで、様々な活動を積極的にやっているところでございます。

本日、提案させていただきます作品資料につきましても、当館に収蔵する資料としてふさわしいかということで皆様、専門的な観点から御覧いただきまして、ぜひ忌憚のない御意見をいただければと思います。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

中村文化行政専門課長：本日御出席いただきました委員の皆様を御紹介させていただきます。私から向かって左の席から順に御紹介させていただきます。

青野委員でございます。

大谷委員でございます。

児島委員でございます。

富田委員でございます。

沼田委員でございます。

堀委員でございます。

続きまして、事務局職員を御紹介いたします。

東京都現代美術館副館長の茂木でございます。

東京都現代美術館事業企画課長の丹羽でございます。

東京都現代美術館事業係長の岡村でございます。

次に、お手元の資料の御確認をお願いいたします。

一番上にございますのが会議次第、それから資料 1「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会コレクション部会委員名簿」、資料 2「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱」、資料 3「東京都現代美術館美術資料収集方針」、資料 4「令和 5 年度東京都現代美術館収集候補作品一覧表」、資料 5「作家・作品説明書」、コレクション部会の評価表を

お配りしております。資料に不足等がございましたらお知らせください。

また、お手元の資料については、現時点で未公開の情報がございましたので会議終了後、回収させていただきます。

それでは、議事に入る前に、委員長の選任をお願いしたいと思います。当部会の委員長は、東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱第8の規定により、委員による互選で定めることとなっております。いかがでしょうか。

堀委員：富田委員を委員長に推薦したいと思います。

中村文化行政専門課長：ただいま委員長に富田委員を推薦いただきましたが、ほかに御意見はございますでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

中村文化行政専門課長：それでは、委員長は富田委員をお願いいたします。

富田委員長：ただいまの御推薦により、本会の委員長を務めさせていただきます富田でございます。改めてよろしくお願いします。

円滑な議事進行に御協力賜りますようお願いいたします。

私も東京都現代美術館は日本を代表する現代美術館だと信じておりますので、ぜひ充実した収集活動ができるようお力を皆様お貸しいただければと思います。

では、早速議事に入りたいと思います。

まず、部会の公開について、事務局より説明をお願いいたします。

中村文化行政専門課長：当部会は、東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱第10の規定により、原則公開となっております。

しかし、資料収集決定前の段階で対象資料の詳細を公開することにより、現在の資料所有者に不利益を生じさせるおそれがあること、また、資料の現物確認については所有者から参考用に借用していることから、本日の段階では議事内容は非公開とすることが適当と考えます。

なお、当部会の議事録については、同要綱第10第2項の定めに基づき、資料収集決定の後、公開を予定しております。公開に当たっては、委員の皆様には追って内容の確認をさせていただきます。また、委員の皆様のお名前と現職名は、東京都のホームページ上に公開しております。

議事内容を非公開とするには、同要綱第10第1項（2）及び第2項（2）の規定により、部会での決定が必要になります。このことについて、事務局といたしましては、委員の皆様にお諮りいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

富田委員長：それでは、コレクション部会の公開の是非についてお諮りします。

事務局から本日の段階での議事内容は非公開が適当との意見がございましたが、皆様、いかがでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

富田委員長：よろしいでしょうか。では、特に異議がないようですので、ここから先の本

部会の議事内容は非公開とさせていただきます。

では、事務局から資料の御説明をお願いいたします。

茂木副館長：候補作品について御説明をいたします。

本日お諮りする作品は、購入50件、寄贈63件です。詳細は、事業企画課長の丹羽、事業係長の岡村及び担当学芸員から御説明をいたします。

丹羽事業企画課長：まず、資料3「収集方針」を御覧ください。こちら特に大きな変更はございませんけれども、改めまして、首都東京、国際都市東京の美術館にふさわしい現代美術の作品及び資料を収集する。そして常設展示室の一層の充実を目指すというものでございます。また、現代美術という幅広い表現、多様性に対応することとして、社会的な多様な課題に対応するような表現というものを、収集の方針ということになっております。こちらの2の(2)、収集分野のところのこの記号などは、後に出てまいります資料4、5の記号と対応しておりますので御参照ください。

そして、資料3の裏面、収集の購入に関することの方針でございます。こちらのほうも、今、申し上げました収集方針に則りまして、日本の若手の作家に重点を置くこと、また、コレクションを補完していくような作品ということも収集の方針になっております。バランスよく購入することというところで特定の地域に偏らない。そして、これまでジェンダーバランスのことなども問題になっておりますので、そのあたりを積極的に取り組んでおります。この後、こちら収集の資料4、5に即しましてこのお部屋の中で概要を説明して、その後、作品の実見というふうに進行させていただきたいと思います。

今年度の作品の収集の概要について簡単に御説明申し上げます。今回の重点ポイントといたしましては若手作家、若手といっても、公立の美術館でございますので、中堅の作家のフォローアップなどを重点的に今回もセクションしてみました。1990年代生まれの作家まで今回含まれております。そして女性の作家、これもこれまでの現代美術史においてジェンダーアンバランスの解消というところで、これまでの作家、パイオニアの世代、戦後世代の作家の収集にも重点を今回置いております。また、既に収集した作家の作品を補完するようなもの、そしてその作家同士の現代美術の流れを補完するようなものといったものも今回、収集に充てております。

では、各作家の概略について、事業係長の岡村より御説明申し上げます。

岡村事業係長：お手元の資料4「候補作品一覧表」と、資料5「作家・作品説明書」を併せて御覧ください。作家・作品説明書には一部別紙もございますので、順にたどっていきたいと思います。

資料は購入作品の後に寄贈作品がリストされておまして、それぞれおおむね作家の世代順に並んでございます。購入に合わせて同じ作家の寄贈の作品がある場合は、順番が若干前後いたしますけれども、寄贈分も一緒にコメントさせていただきたいと思います。

では、まず最初に購入作品の1番から11番、こちらは漆原英子の作品です。1929年生まれの漆原は、1950年代から人間と獣が混然となったようなシュルレアリスム的な表現によ

る密度の高い油彩画で注目を集めた作家です。当館コレクションには東京都美術館時代に1966年制作の油彩作品1点の収蔵がございますが、2002年に亡くなるまでに続けられた画業については、見直し・再評価の手がかりとして今回まとまった形での収集をできればと考えております。

1番と2番は共に1956年の油彩作品です。

続いて、3番から11番は1960年代末から90年代に描かれた素描作品です。10番までは1枚のシートにまとめておりますので詳細、別表がついてございます。また、11番のみ御遺族からの購入となるため、シートを分けさせていただいております。

併せて、漆原英子につきましては、このほかに御遺族からの寄贈が2点ございます。御寄贈の1番の油彩画「THE GUARDIANS」というものがございます。購入は50番までございますので、その後になります。寄贈の1番を見つけていただけましたでしょうか。「THE GUARDIANS」は木枠から外した状態で保存されておまして、今後修復を要するものではあるんですけども、画題やサイズ共に残すべき作品と判断いたしました。後ほど御覧ください。

寄贈の2番は、1978年から2000年まで続けられた大変貴重なコラージュ日記、計9冊になります。今後の作家の研究の上でも大変に重要な例となると思っております。

続きまして、購入の12番から13番に戻させていただきます。こちらは塩見允枝子の作品です。フルクサスへの参加が知られる塩見については、当館ではマルチプルや楽器などの作品を既に収蔵しておりますが、今回お諮りするのとは、作家自身がフルクサスにまつわるオブジェクトや活動の記録をキットと称して構成したものです。既に収蔵した作品と合わせて塩見作品のより多角的な検証に資するとともに、フルクサスの国際的な交流や時代を超えた先進性などの紹介にもつながると考えております。当館の20周年記念事業の一つとして開催された、フルクサスのオリジナルメンバーによる「フルクサス・イン・ジャパン 2014」に関するものも含まれておりますので、当館ともゆかりの深い資料になるかと思っております。コロナ禍の間に3点が制作されているんですけども、2点を購入、1点は寄贈の6番としてオファーいただいております。こちら現物を見ていただけますので。

購入の14番から17番は合田佐和子の油彩作品です。1940年生まれの合田は2016年に亡くなっています。当館ではこれまで収蔵の機会がなかった作家の一人ですけれども、2022年から23年にかけて国内2館で没後初となるまとまった回顧展が開催され、その活動の展開を再検証する機会に恵まれました。その後、同回顧展の企画を担当された学芸員の方のお力添えもあり、当館でも調査をさせていただいたところ、幸い各年代の代表作はまだ入手可能であることが分かり、今回、複数作品の収蔵案としてまとめました。

14番の「寝台」は、合田が初めて油彩画を発表した1972年の個展の出品作で、特に作家が最後まで手元に残すことにこだわった1点と言われております。

また、15番の「おちよこの傘持つメリー・ポピンズ」は、状況劇場による演劇作品のポスター原画として描き下ろした油彩画で、合田のアングラ演劇との関わりを示す上でも重

要な作品です。

加えて、16番は80年代の代表作、17番は1990年代中頃の1点となります。

併せて、寄贈の7番から11番までに、収蔵に合わせて御遺族からの寄贈作品・資料がございます。いずれも今後の展示や作家研究に資するものと考えております。

続きまして、購入の18番、19番は、寺内曜子の彫刻作品です。1970年代末にイギリスに渡りましてアンソニー・カロに学んだ寺内は、欧州での活動を経て1999年に帰国しています。1980年代から90年代のイギリスにおける彫刻の新しい流れを批評的に汲みつつ、独自のコンセプチュアルな彫刻やインスタレーション作品で高く評価され、長くキャリアを積み重ねてきた作家です。当館では2017年度に3点の収蔵をしておりますが、今回、欧州時代の発表作で鉛を用いた18番「One Coil」と、2017年に発表された「パンゲア」シリーズの1点である19番を加えることで、寺内作品の変遷とともに、そこに通底する思考の軸をより深く伝えることが可能になると考えております。

購入の20番と21番に移らせていただきます。こちらは前本彰子の彫刻作品です。1957年生まれの前本は、ポストモダニズムの流れを汲む女性作家の一人として1980年代初頭から注目を集め、1989年から1991年に国際巡回した「アゲインスト・ネーチャー」展にも選ばれております。当時のいわゆる「超少女」などというカテゴライズの功罪も含め、1980年代以降の美術史を見直す上で、当館のコレクションに欠けていた存在の一人と思います。また、フェミニズム的視点や手芸やサブカルチャーとのつながりといった点において、今後コレクションの中核に加わっていくであろう次の世代以降の作家・作品にとって、先駆的な参照例ともなうと思います。前本が1980年代から手がけてきた大型のドレス作品と2000年代のレリーフ作品という2作品の収蔵により、コレクション展においてより効果的なプレゼンテーションが可能になるかと思えます。

続きまして、購入の22番から24番は嶋田美子の版画作品、併せて25番から28番は嶋田とブブ・ド・ラ・マドレーヌとの共作によるビデオ作品とコラージュ作品です。嶋田美子は1988年から女性と戦争をテーマにした版画制作を始めました。「R & R」と題された1996年作のシリーズは、東京都の立川市出身の嶋田が幼少期から見聞きしていた戦後の基地周辺文化を、フェミニスト的視点で捉え直した作例の一つです。嶋田とダムタイプの初期メンバーとして知られるブブとの共作によるビデオ作品「メイド・イン・オキュパイド・ジャパン」は、同名の展覧会で合わせて発表された26番から28番のコラージュ作品とともに、1990年代におけるフェミニスト・アートとポストコロニアリズムの交差例として先駆的であり、次世代の作家たちの作品との比較においても重要な先行例として紹介していくべきと考えております。併せて寄贈の13番にありますが、嶋田美子のさらに初期のエッチング作品1点を加えて、様々な角度からの展示を行っていきたいと思っております。

続いて、購入の29番は長谷川繁の絵画作品です。長谷川については、1990年代半ばから展開される具象絵画の新しい展開の担い手の一人としてかねてより重要視しており、2020年度には2007年から11年にかけて制作された絵画4点を

購入、2022年度には御寄贈により1995年の小品を1点収蔵させていただいております。今回の収集候補作、これは当て字なんで読みづらいと思うんですが、「法被威徳猥屠摩訶論（はっぴいほわいとまかろん）ちゃん」と読むのですが、これは1990年代後半に高さ約3メートルのキャンバスに、絵画史上ありふれた画題をあえて選んで、それを巨大化して描くという一連の作品の一つです。既に収蔵した長谷川作品と合わせて展示することで長谷川の作家性とその作品の変遷を示すとともに、コレクションのほかの絵画作品との対照によって、「絵画とは」という問いをめぐるより普遍的な議論を引き出すことができると期待しております。

続きまして、購入30番以降は、今年度特に重点を置いた若手作家及び、中堅と言うべき世代で着実な実績がありながら、若手の時期に収蔵に結びつくような関わりを得ることができていなかった作家についての作品となります。具体的には、1970年代生まれ以降の世代の中から議論を経て取りまとめた収集候補作となります。

購入30番から34番までは青山悟の作品です。青山の作品は、主として写真イメージを工業用ミシンを使って刺繍に変換するという技法において共通しています。その中でも2012年から17年にかけて手がけられた複数作品を収蔵することで、その変遷と関心の幅を示せたらと考えております。

2点組みとなります購入の30番は、ある雑誌記事を切り抜いた際の紙面の表と裏に印刷された像を、それぞれ刺繍に変換しているものです。

購入31番は、一見ただの白地図のように見えますけれども、一部に蓄光糸を使っているため、ブラックライトを当てることで意味が生成するというパフォーマンス的な仕掛けをはらんでおります。

購入32番から34番は、古い版画作品に描かれた女性像と女優や歌手などの現代のポップアイコンのイメージを重ね合わせた、ちょっとフェミニスト的な視点も含まれたシリーズです。

加えまして、作家からの寄贈としてもう一点、寄贈作品59番として「The Lonely Labourer」がございます。こちらは完全に自動制御されたミシンによる刺繍の様子を捉えた映像と、その中で作られている刺繍作品とのセットとなっております。

購入35番と36番、こちらは佐藤雅晴の映像作品になります。佐藤は、実写映像を基にそのイメージをトレースすることでアニメーションに変換するロトスコープという技法で知られる作家です。いずれもワンシーンのみの比較的短いフッターを延々とループで再生する、言わば絵画的な展示となりますけれども、35番の「バイバイカモン」のほうは1画面のみのプロジェクションか大型モニターでの展示、36番の「9 holes」は、9つの画面をそれぞれ別々のモニターで上映する映像インスタレーションとなっております。「9 holes」のほうは、ロビーを含めた様々な空間に展開することが可能な点でもコレクション展示に変化をつけることが期待できるかと思います。1973年生まれの佐藤は、残念ながら2019年に病気のため若くして他界されております。今後作品が増えることがない中、この機に収

集ができればと考えました。

購入の37番、38番は長谷川愛の映像インスタレーション作品です。生物学や先端科学にフィクションを掛け合わせ作品化する長谷川愛の作品は、日本におけるスペキュラティブ・デザインの実践例として既に世界各地で多数紹介されてきました。新たなテクノロジーの急速な発展や、もはやコントロールが不能な地球環境の変化の中で、これまでにない視点から未来を捉え直すという思考実験的な意義だけではなく、プレゼンテーションの在り方や文学性を現代美術としても評価、十分にし得ると考えております。

購入37番の映像作品「私はイルカを産みたい…」には、展示の際に用いることができるダイアグラムや図版のデジタルデータも併せて含まれます。

さらに、寄贈60番から62番として、映像と一緒に展示することでその世界観がより深まる写真作品や3Dプレートによる模型像などの御寄贈もいただいております。

購入の39番から45番までは、ミヤギフトシの映像作品2点と映像に関連した写真作品です。入念なリサーチをベースに過去の人物や歴史的な出来事・エピソードに、時代や場所、音楽、言語といった要素を織り込んだフィクションを構築し、映像や写真、テキストやオブジェなどの形で展示するスタイルで評価されてきた作家です。

関係する写真作品のうち1点については寄贈の63番として頂いております。

映像作品のうち購入39番の「A Romantic Composition」は、ベトナム戦争時代の沖縄を背景とした物語、購入41番の「How Many Nights」のほうは、第二次世界大戦前後のアメリカと日本を背景に、両国にまたがって生きた女性たちに焦点を当てた物語となっておりますので、それぞれにミヤギの作風を体現しつつも主題の変化も感じさせる組合せとなっております。

購入の46番から48番、こちら青柳菜摘の映像作品です。1990年生まれの青柳は2001年頃、つまり10代の初め頃よりインターネット上でイラストや絵の発表を始めていたというまさにデジタルネイティブであり、ポストインターネット世代の中でも早くから注目をされてきた作家の一人です。

購入の46番と47番は、都会の中の自然を観察しながらつづられる映像に作家自身のモノログが重なる二期的なプライベートドキュメンタリーの形式、購入48番は、コロナ禍下の12か月という時間を、インターネット上のサービス等を介して集められた他者の物語やイメージの集積によって体現するものです。今後のさらなる展開も期待される中、作家としての評価の起点となる代表作と、そこからの展開を示す最近作を組み合わせた収蔵案となっております。

購入の49番と50番は熊谷亜莉沙の絵画作品2点です。熊谷は1991年生まれ、今回の収蔵候補作家の中では最年少ながら、その精緻な画力には既に十分な定評があり、個人史に関わるモチーフをドラマチックに描き出す作風で、御自身の世界観を確立しているかのよう

に既に見えます。

購入の49番は、これまで主題としてきた祖父の姿を描いたもの、対して50番は、近年作

家が興味を寄せているカトリック文化への考察が投影されたものとして、現時点での作家の到達点と変化の兆しの双方を、まるで2点対作品のように見ていただけるかなと思っております。後ほど御覧ください。

続きまして、今回寄贈のみとなる作品について、順に説明してまいります。

寄贈の3番は、松本陽子の東京藝術大学小磯良平研究室時代の卒業制作である絵画作品1点です。当館では松本陽子の絵画4点、ドローイング10点を所蔵していますが、いずれも1990年代から2000年代の制作です。長きに渡る作家の活動の初期を伝える本作は、作家の活動の変遷の検証に寄与するだけではなく横軸として、つまり、1950年代から60年代頃の動向や状況について、同時代の収蔵作品と合わせて検証する手がかりにもなる貴重な作品と考えております。

寄贈の4番は李禹煥の2021年の近作となります「応答」です。本作は、2021年に国内2館で開催された大規模な回顧展に、最近作の一つとして発表された作品の一つです。当館では、東京都美術館に1970年代の代表的な絵画作品を初め、立体やドローイングや版画、折々の作家の活動を示す作品を収蔵しておりますが、80歳代半ばにしていまだに旺盛に制作を継続している作家の新たな境地を示す本作を加えることで、更なる充実を図れたらと考えております。

寄贈の5番は横尾忠則の版画作品です。こちらは、現在開催中の「MOTコレクション」展での横尾忠則の特集展示に貸出しを受けまして出品中です。横尾忠則については、東京都美術館時代以来、折々に作品を加えるとともに、昨年まとまった寄贈を受けており、計58点の作品と二次資料34点を収蔵しております。今回はプリント作品1点の御寄贈ですが、同じモチーフが反復して作品に登場する横尾の作品としては珍しく、ほかでなかなか見られたことのない構図と抽象的な絵柄を取っており、横尾の多面性の考察にも資することから、御寄贈を受けてコレクションに加えたいと考えております。

寄贈の14番から22番、こちら栗田宏一の作品です。栗田は世界各地を訪ね、その土地の土を採集したり小石を拾うなどのシンプルな営為を長期にわたり継続し、その行為の痕跡を作品として発表してきた作家です。

14番は、1988年から2002年までに行った旅の過程で採集した土を、現地のはがきに貼りつけて自宅宛てに送付するという営みの集積であり、作家最初期の重要作と言えます。

15番は当館収蔵品で、現在、「MOTコレクション」展1階で展示されている「POYA DAY」シリーズの続編とも言えるもので、現在も続く営みの記録としても、まとめて収蔵し展示することが望ましいと考えます。

寄贈の23番から48番、こちらは松江泰治の写真作品26点となります。こちらも別表がついてございます。松江泰治は、1990年代以降の日本の写真表現を考える上で不可欠な作家の一人であり、写真と現代美術の近接あるいは越境例としても重要です。候補作品は、これまで撮り貯めてきた未発表の写真から作家自身が選りすぐり、あえて自然と都市の風景を区別することなく総体で展示するものとして新規にプリントし発表したものです。当館

では、休館中に地域との連携により実施した「MOTサテライト」への出品を機に、深川地域を捉えた言わば地域ゆかりとも言える写真作品14点と映像作品2点を収蔵しております。このシリーズを加えることによって、世界各地で撮影を続けてきた作家の活動の核を端的に示すことが可能になると思います。

寄贈の49番から58番までは、現在当館で個展を開催中の作家、豊嶋康子の作品です。今回の出品作品の中でも代表作と言っている49番の「マークシート」作品、50番の「エンドレス・ソロバン」は、今回の展示のために全面修復が行われたもので、作家からの御寄贈となります。

51番から58番は、所属ギャラリーからの御寄贈となっております。

当館には23点の収蔵がございますが、豊嶋の1990年頃から約30年以上に及ぶ活動を展示する今回の展覧会の出品作品が、約500点に及ぶことから、作家の仕事の総体を伝えるには、今後も複数の作品を組み合わせで紹介できることが望ましいと考え、個展開催のこの機にまとまった御寄贈を受けたいと考えております。

以上、駆け足でございましたが、概略は以上でございます。詳細は、引き続き作品を実見いただきながらお話しさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

富田委員長：ありがとうございました。

それでは、作品の実見に移りたいと思います。

(委員離席)

(作品実見)

(委員着席)

富田委員長：では、非常にたくさんの作品を拝見しましたので、どこから手をつけていいかという感じがしますが、まず、今拝見した中で御質問とか何かありましたら、この場でお伺いしていくと。

堀委員、どうぞ。

堀委員：長谷川繁さんの作品にタイトルがついていたと思うんですが、あれは発表当初からついていたものでしょうか。

岡村事業係長：後日つけられたと伺っております。

富田委員長：よろしいでしょうか。

ほかはいかがですか。

じゃ、青野委員、どうぞ。

青野委員：前本彰子さんのドレスは、どういうふうに保管されるんですか。

岡村事業係長：あれは実は約半日で組み上げておまして、上部のボディーパーツとドレス部分は巻き取ることができまして、あとパーツがもう一つあって、あと縄という形で、芯の部分は金属の骨組みになっておまして解体して折り畳むことができますので、見た目よりはコンパクトに収蔵ができる予定でございます。

青野委員：それは、その作家の方がいらっしゃらなくても美術館のほうで。

岡村事業係長：今回は作家さん立ち会いの下、展示させていただいたんですけれども、詳細な指示書も頂いておりますので、今後は工夫しながら展示できると思います。

青野委員：ありがとうございます。

富田委員長：ほかはいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

じゃ、大谷委員。

大谷委員：佐藤さんの9点組みの映像作品ですけれども、作家さんが亡くなられてしまって、使い方とかについては、もう展示する側が自由にできるという、そこら辺は生前そういうふう作家さんがおっしゃっていたというふうを考えてよろしいでしょうか。

岡村事業係長：そうですね。あと作家さんと近しくお仕事をされてきた方たちが指示書を取りまとめてくださっているの、ベーシックなものの方はそれに沿いまして、あとは環境に合わせて私どものほうで今後計画させていただこうと思っております。

大谷委員：分かりました。

富田委員長：ほかはいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、意見交換と評価のほうに移りたいと思います。

まず最初に評価表のほうに記入をしていただいて、その後で御意見を皆様で伺うということにしたいと思います。

作品の評価方法等について、事務局から説明をお願いいたします。

中村文化行政専門課長：作品の評価方法について御説明させていただきます。

お手元にごきます評価表のほうを御覧ください。評価表には、今回の収集候補作品が一覧で記載されております。作品ごとにA、B、Cの3段階で評価させていただきます。Aは収蔵すべきである、Bは収蔵してよい、Cは再検討を要するという評価になります。A、B、C、いずれかに丸をつけていただきます。委員の皆様の御記入後、評価表を回収させていただきます、事務局で確認いたします。

評価方法の説明については以上です。

なお、確認の結果C評価がついた作品があった場合、後ほど理由をお伺いできればと思います。

富田委員長：評価方法について御質問ありませんか。大丈夫でしょうか。

では、まず記入のほうをお願いいたします。

大谷委員：もう一個だけいいですか、質問を。

富田委員長：どうぞ。

大谷委員：ごめんなさい。作品はとていいんですけれども、基本的な考え方として教えてください。松江さんの作品、今回こちらでお入れになりますけれども、写真美術館さんとそこら辺収蔵の振り分けって、どういうふう考えられていらっしゃいますか。

丹羽事業企画課長：写真美術館では松江さんは重点収集作家でいらっしゃいますので、この後の収集の計画などを確認しながら、どちらの美術館で持っているほうがより活用でき

るかといった視点と、あと作家さんの御意見、やはりこちらの地元でいらして、地元で作られた作品をこちらが持っているというところの観点を事前にすり合わせまして、今回の作品は現代美術館のほうで所蔵するというふうになっております。

大谷委員：分かりました。ありがとうございます。

富田委員長：では、記入をお願いします。

(委員 評価表記入)

富田委員長：C評価はありませんでした。

では、委員の皆様から総評をいただきたいと思うんですが、前回は堀委員からですよ。どうぞ沼田委員のほうから。

沼田委員：大変充実した収集候補と拝見いたしました。特に女性のアーティストがすごく多くて、最初にお話がありましたように、今まで収集がなかなか進まなかった女性の作家のジェンダーバランスのことが、今、美術業界でも大変話題になっておりますので、その点にすごく配慮された候補作品とお見受けいたしました。

特に漆原英子さんの作品、私もこのような形でまとまって拝見したのは初めてで、そのクオリティーの高さと面白さにとっても感銘を受けました。そのような形で、これまで見過ごされた作家をちゃんと発掘されているような活動にも、とても感銘を受けました。

あとは手芸とか針と糸とか、そういう今までの美術の中では周辺とされていたような技法にも注目されている点が、とてもいいなと思ひまして、前本さんの作品とか青山さんの作品などを美術館で展示することによって、また表現の素材としてそういうものに注目する作家の方も増えていくのではないかと思います。うれしく思いました。ありがとうございました。

富田委員長：ありがとうございます。

じゃ、堀委員、続けてどうぞお願いします。

堀委員：大変すばらしい収集だと思いました。これまでこちらの館で集められてきた作家で欠けている部分を補われたり、またちょっと珍しい作品を入れられたり、そして新しい作家、若い作家の作品を入れたりということで、松本陽子さんの卒業制作というのも非常に——ちょっと傷んではいましたけれども——新鮮でしたし、あと李さんの大作がまた寄贈で入れられるというのも、こちらの館ならではのかなと思います。あと合田佐和子さん、昨年の巡回展、非常にすばらしかったと思うんですが、そこからまたこちらの館のコレクションにいいものが加わるということで、大変充実したコレクションになるかなというふうに思います。

以上です。

富田委員長：ありがとうございます。

では、青野委員、次でお願いしますか。

青野委員：まさに今お2人の委員から御指摘もありましたことを、私も本当に思っております。大変充実した購入計画だと感服しております。

1つだけちょっと言わせていただくと、佐藤雅晴さんにつきましては、実はこれ両方とも私どもの品川の原美術館での個展の際に展示をしておりますので、出品歴に加えていただければとちょっと思ったんですけれども、「バイバイカモン」は、原美術館に入って最初の入り口のすぐ真正面に置かせていただきまして、「9 holes」につきましては、先ほどから何回か御議論に出ているように展示の仕方がかなり自由なんですね。私どもでは、この中の「トイレットペーパー」というものだけ、今はなき原美術館の2階の一番奥に奈良美智さんの部屋をつくっていたんですが、その奈良美智さんのお部屋にする部分が、実は個人の私邸だった頃はあそこがバスルームだったんですね。それにちなんで奈良美智さんの部屋の前室に、「トイレットペーパー」だけを出させていただいた経緯がございました。そういうふうにかかなり本当に自由に使えるという意味でも、今後いろいろな汎用性があるのではないかなというふうに思った次第です。

もう一つだけ言うと、長谷川愛さんが入っているのは非常にうれしく思いました。

以上です。

富田委員長：ありがとうございました。

大谷委員、お願いします。

大谷委員：大体皆さんと同意見ですけれども、これだけたくさんの作家、作品をリサーチして集められてこられたのは、大変な労力だったと思います。特に現代の作家さんの場合は、あるものをこれが欲しいというんじゃなくて、作家さんと交渉して何が一番ふさわしいかと、かなり時間をかけたやり取りをした上で入れていくことになると思うので、これだけたくさんのものをリサーチして集められているというのは、本当に素晴らしいことだと思います。

本当に先ほどからお話あるとおり、今、女性作家の見直しというか、今までどうしても抜けがちな方々、もう一度ちゃんと見直してふさわしいものを収集していくというのを、ほかの美術館も含め今取りかかっているところだと思いますけれども、そういう中で本当に貴重なものを入れられていると思います。漆原さんの作品、50年代の作品がまだ残っているというのは存じ上げないというか、よく掘り出してきたなというふうに、とてもいいものが入ったと思いますし、木杵がなくなっちゃっているあの作品も、修復して展示されるのをとても楽しみにしております。ぜひきれいにしていいただければと思います。よろしくをお願いします。

富田委員長：児島委員、お願いします。

児島委員：皆さんがおっしゃられたことに本当に全て賛成です。最近も1954年の「抽象と幻想」展の振り返りが東京国立近代美術館でありましたけれども、今見ますと結構女性の方が入っていて、しかも最近高く評価されているような方たちが入っていて、50年代には結構女性作家さんが表に出ていたんですが、70年代ぐらいから徐々にちょっと後ろのほうに追いやられたかなという感じが、個人的にはしています。ですので、その頃まで振り返って、今回のように漆原さんのような作品が入るというのは、とても重要なことだと思います。

ますし、またほかにもまだ発掘できるようであれば、ぜひしていただけたらいいなと思います。

それから、この塩見さんであるとか合田さんとか、それほど収蔵されていなかったけれども今となっては著名な方たちの作品がこういう形で収蔵されるのは本当に良いことだと思います。多分メディアの問題ですとか、その方たちが受けた美術教育の問題とか、海外で活躍していたとか、そういうことによって国内的な何かの事情で評価が後になっていたかもしれないと思います。こういう形でそういう作家さんが入ることでこちらの収蔵の幅や展示の幅がすごく広がって、今後また新たな展開につながりそうなのが大変楽しみです。

長くなりますけれども、あとミヤギフトシさんのように社会的なこと、歴史的なことをリサーチをされて作品を作るという方の作品や、やはり嶋田美子さんのように社会的なことに目を向ける作品が今回、いえ今回だけではないと思いますけれども、新たに加わってとても良いと思いました。

富田委員長：私もちょっと一言申し述べますが、大変充実した収集で非常に感銘を受けました。これだけのものを収集委員会に出すためには、日頃から作家の方あるいは御遺族の方、それから画商さんとかコレクターの方とかと非常に密なお付き合いをしていないとなかなかできないことですよね。ですから、ふだんから恐らく皆さんいろいろなところに出かけて、そういうコミュニケーションを取っていらっしゃるんだらうなということが非常によく分かる収集でしたので、これからももちろん美術館の中でやらなきゃいけない仕事もたくさんあると思いますけれども、できるだけ外に出ていろいろな方とコンタクトを取りながら、今後もこういう充実した収集を続けていっていただければなというふうに思った次第でございます。

では、これまでの意見交換を踏まえまして評価表の内容を変更したいという方はいらっしゃいますか。よろしいでしょうか。

そのほか何か特に御発言があれば。よろしいですか。

では、これをもちましてコレクション部会を終了いたします。

皆様、どうも本当にありがとうございました。

それでは、事務局のほう、よろしくお願いします。

中村文化行政専門課長：富田委員長、ありがとうございました。

冒頭に御説明させていただきましたが、お配りしました資料一式は回収いたしますので、机の上に置いたままにしていいただければと思います。

これをもちまして、令和5年度東京都現代美術館美術資料収蔵委員会コレクション部会を終了いたします。

委員の皆様、本日はありがとうございました。

午後0時27分閉会

以上